

(著者注：南アへの出張は1998年のことなので、今とは事情が大きく異なっている。)

南アフリカ素描（1） ― サントン・シティにて ―

――遠い国――

南アフリカは、遠い国である。日本とヨハネスブルグの間の直行便もなく、香港やロンドン乗換えで22～23時間はかかる。アフリカはわたしにとって未知の大陸である。

国際会議でヨハネスブルグに行くことになった時、気が重かった。わたしよりはるかに国際ビジネスで活躍しているA弁護士ですら、「矢部さん大丈夫かねー。何でもまた南アなんかに行くの?」といい出す始末である。

マラリア、黄熱病、アパルトヘイト（人種隔離政策）、流血、拷問など南アに対するイメージはマイナスのイメージが濃い。

かなり躊躇したあげく、ようやく重い腰を上げ行く気になったのは、大切な会議なので滅多な理由では欠席できなかったのと、単純といえば単純だが、南アの花を見たかったからである。南半球にあるこの広大な国には、24,000種の顕花植物が自生する。直径30センチにもなる大輪のキングプロテア、紅のウニのようなピンクッション、銀葉樹という美しい和名のリュウカデンドロン。深紅色、ピンク、黄橙など色鮮やかな幻想的な花が多い。その中でもわたしは「ジャカランダ」の花に魅かれていた。

現地に知り合いもなく勝手がわからないので、いつもと違い準備には念を入れた。マラリアや黄熱病の情報を集め、虫よけスプレー、蚊取りマットを買い、胃薬やアスピリンなど薬も十分に準備した。空港からホテルまでの治安も不安だったので、リムジンを手配した。

後に他の参加者に聞いてみると皆同じ様な不安を持っていたらしい。タイから来たワラウットは空港からホテルまでのガイドを頼んでいたというし、イタリア人のガブリオも、マラリアに備えて薬を飲んできたという（予防薬は1週間前に2回飲まなければならない。ただし、予防薬はあまり効かないし、薬によっては生死にかかわる強い副作用があるらしい）。

――五つ星ホテルに泊まる――

ヤン・スマック国際空港に到着したのは午前6時少し前、陽はまだ昇らず辺りは暗かった。ヨハネスブルグは海拔1,800mの高地で、心なしか空気も薄い。日本では春だがここでは初秋である。機内で待つうち次第に水平線の彼方が明るくなり始めた。長旅に疲れていたが、わたしは「これがアフリカ大陸の日の出か」、と多少の感傷に浸った。通関では痩せぎすの背の高い黒人担当官が “Good morning” と丁寧な英語で話しかけてきて、何かほっとした。通関すると、出口には早朝にも拘らず白人ガイドのフレアリーが出迎えてくれた。彼は40代半ば。インテリで快活な人柄だったので、わたしの不安は一挙に解消した。

わたしたちは、ヨハネスブルグから車で20分ほど北にある、サントン・シティーへ向かった。なだらかな丘陵を車は走って行くが、早朝なので人もみかけず、ただ、広いむき出しの大地が広がっている。ときどき小さなトタンで囲んだバラックが数百も並んでいるのが見える。フレアリーに聞くと、地方から出てきた黒人たちが違法に住み着いているとのことであった。

サントン・サン・ホテルに着いて、わたしは出発前の心配が全くの杞憂だったことをすぐに知った。このホテルは5ツ星で、今まで泊まったホテルの中でも最高級のホテルだった。中央が吹き抜けになっていて天井がガラス張りで光が注ぎ込む。ガラス張りのエレベーターが3基、吹き抜けに面して昇降している。20階建ての高い天井から光が差し込む様はまるで大聖堂を思わせる。

部屋も快適だった。エアコンも十分効き、個人用のファックスが備えられている。2つのバスルームからは熱いお湯がふんだんに出る（アメリカの一流ホテルでさえ熱いお湯が出ないことがたまにある）。

国際電話をかけるにも多少トラブルがあるかと危惧していたが、何の支障もない。ベッドのシーツも清潔だし、2台のテレビでは、BBC、CNNのワールドニュースが見られる他、アクションもの、冒険ものなどのビデオが見られる。もちろんプール、サウナなどの設備も完璧だし、医者も24時間常駐している。蚊取りマットは全く必要がなかった。レストランにもちゃんとノースモーキング・セクションがある。

サントン・シティーは、外部とは隔絶された清潔で安全な人工都市である。高級レストランが溢れ、レイトナイト・ショッピングと称して、夜遅くでもショッピングができる。

アパレル、時計、陶器、靴、レザーグッズなどの高級ブランドの店が賑わい、地下にはポルトガル、イタリア、中華、和食などのレストランが続く。地下のアミューズメント・センターではゲームセンターや、映画館が軒を連ねる。映画館といっても15もの映画館があり、ブロックン・アロー（ジョン・トラボルタ主演）、ベイブ、トゥエルブ・モンキーズ（ブルース・ウィルス主演）といった最新作が上映され、その何本かは日本でもまだ封切りされていない映画である。週日の午後というのに、若者で賑わっている（ただし、ほとんどが白人である）。

南アに対するわたしのマイナスイメージは完全に外れた。

— 貧困の影 —

サントン・サンは超一流のホテルだが、ホテル生活にも時折南アの抱える貧困の影が反映する。

ホテルの要所には黒人のセキュリティ・ガードが数多く配置されている。彼らはロビー階やエレベーター付近で警備するとともに、客がエレベーターに乗る時には、素早く行先のボ

タンを押してくれる。安全が売り物のホテルとしては当然の事だろうが、ガードがこう目立って配置されている例は先進国ではあまり見かけない。

ホテルに着いた次の日、わたしはバレット・サービスに電話をし、2日分溜まった洗濯物を取りにきてくれるよう頼んだ。海外出張をするとき、荷物を手軽にするため、わたしは3日分の着替えしか持たない。昔と違って今では朝に洗濯物を出せば夕方には仕上がっているから便利である。

洗濯物を取りにくるのを待っていたがなかなか来ない。待つのも面倒なので、備え付けの洗濯物入れのビニール袋に下着や靴下を入れ、部屋の外のノブに掛けておいた。

ほどなくドアを叩く音がする。“Valet service”. 出みると洗濯物を取りに来たという。

先ほどドアの外に出しておいたはずなんだが……。

わたしがいうと、「ドアの外には何もない」との事。まさか盗まれたとは思わないから、「では通りがかりの他のスタッフが気をきかして持っていっただろう」ということになった。だが、結局、洗濯物は発見されず、盗まれたと分かった。ドアの外に出してからわずか10分ほどの間に盗まれた！わたしの部屋は19階で外部の者は滅多に入ってこないし、洗濯物だからまさか盗まれることはない、と高をくくっていたのだが…。

もう1つ気になったのはレストランのウェイトレスにも極端な対応のばらつきがある事。

「コーヒーをもう1杯」と頼んでも返事もしないでいってしまう者、公用語の一つである英語も十分聞き取ることのできない者、極端な訛りがあつてこちらが聞き取れない者など、よくこれでサービス業が務まると思う者もいる。

彼らは職業教育を受ける機会もないunskilled laborなのだろう。日本の様な高度教育国家にいとわからないが、教育が国の礎としていかに大切か、南アに来てわたしは今さらながら痛感した。

— ジャカランダを追って —

この日は暇を見つけて、ジャカランダ観光に向かった。

ヨハネスブルグから北に向かって車で40～50分、プレトリアという町がある。ここは南アの行政府の首都があり、マンデラ大統領の執務するユニオン・ビルがある（南アには3つの首都があり、プレトリアが行政府、ケープタウンが立法府、ブルームフォンテンが司法府の首都である）。

プレトリアには、7万本ものジャカランダがあり、春には街全体が薄紫に染まりそれは美しいと聞いていた。かつて、中国の桂林で街中に咲き乱れる金木犀を見て感激したが、薄紫の花はもっと素敵なイメージをかき立てた。

初秋とはいえ、ひょっとして咲き残りの花が見られるかと期待したが、それ

は空しかった。ジャカランダの街路樹は整然と並んでいたが、花は散って緑一色だった。期待はずれたが、思いがけない事に、2週間後にわたしは米国でジャカランダの花を見るチャンスに恵まれることになる。（続く）